コルネリオ会

（防衛関係キリスト者の会）

ニュースレターNo. 153

2020 年 4 月

矢田部稔名誉会長天国へ凱旋

コルネリオ会　会長　石川信隆

「見よ。わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、私はあなたを守る。わたしは決してあなたを見捨てない。」（創世記２８：１５）

2020 年 3 月 9 日(月)1030－1130 日本キリスト教団柏教会で矢田部稔コルネリオ会名誉会長(以下、矢田部兄と呼ぶ)の葬儀が行われた。コルネリオ会からは、今市兄、加瀬兄、芝兄、長濱兄と私の 5 名、また元モンゴル宣教師の木島正敏先生も参加された。春原禎光牧師の司式による聖霊に満たされた立派な葬儀であった。

矢田部兄は、1933 年高知県で生まれ、小学５年生の時に父親を亡くし、家族の中で父親代わりとなった。1953 年防衛大学校（当時保安大学校第 1 期生）へ入学。1955 年防大３年の時、横須賀の日本キリスト教団小川町教会で受洗。防大卒業後、ラクビーで痛めた頭部の治療のため 1 年間、故郷の高知で過ごすが、その間も教会生活に専念したそうである。その後、自衛隊に復帰、野戦特科部隊を中心に北海道から九州まで各地を転勤、その先々の教会に出席し、信仰を守り通した。出席した教会数は 20 以上にも上り、クリスチャン陸将補として 1989 年に退官され、2003 年には瑞宝小綬章を受賞された。

クリスチャン歴は、受洗後、1959 年 5 月 23 日コルネリオ会(当時日本 OCU, 会長吉江誠一元陸幕長)の発会式（美竹教会）に参加され、コルネリオ会員として、一貫してその人生を自衛官クリスチャンとして全うされた。

1986 年 8 月日本で初めての軍人クリスチャンアジア大会(当時市ヶ谷会館)の開催にあたっては、今井健次会長(元防大教授)のもとで副会長として補佐し、また 1995 年 8 月の第 2 回目のアジア大会（池袋サンシャインホテル）では、コルネリオ会会長(1992 年-1999 年)として大会を成功させた。（大会テーマ「主を求めて生きよ」（アモス 5:4））。さらに AMCF 世界大会にも奥様（和子夫人）とともに日本を代表して参加され、海外にも多くの軍人クリスチャンたちとの交流をもった。

矢田部名誉会長

コルネリオ会の例会には必ず出席して、我々後輩たちに聖書の指導や自衛隊生活での信仰上の相談にも当たられ、的確な助言をいただいた。矢田部兄が『こころの友』（日本キリスト教団教会誌）に書いた「ある三等陸佐の願い」や著書『武士道・キリスト教と自衛官』(石川書房)は有名であり、この本によって、元海将補・海野幹郎兄が感銘を受け 81 歳になってクリスチャンになった。矢田部兄の信仰と行動の陰には和子夫人の支えと励ましがあり、和子夫人にはコルネリオ会の例会やアジア大会などで大変お世話になった。

和子夫人から葬儀の終わりに「主人は最後まで、自衛官として、そして信仰者として、その人生を自衛官クリスチャンとして生き抜いた。」とご挨拶があった。

矢田部兄はまさに「ミスター・コルネリオ」そのものであり、このような信仰の人･矢田部兄からイエス様を学ぶことができたことを、コルネリオ会一同、主に感謝して、天国での再会を祈るものである。在主

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
なお、AMCF（軍人キリスト者協会）世界会長や台湾の東アジア副会長、韓国・アメリカからも哀悼の意を表するメールが来ましたが、世界会長のみ紹介します。（中野久永兄訳）
『私は、JMCF（通称;コルネリオ会）の先駆者である矢田部稔元将官がお亡くなりになったことを知らされました。私は彼に個人的に会ったことはありませんが、彼のクリスチャンとしての証と長年にわたるJMCFのリーダーシップについて聞いたことがあります。彼は、人生のレースを忠実に走り通しました。私は「主が両手を広げて彼を歓迎してくれた」と確信しております。AMCFのすべてのメンバーを代表して、矢田部和子御夫人と御家族に心からの哀悼の意をお伝えください。キリストによって敬意を表します。
軍人キリスト者協会（AMCF）世界会長
元将軍　スリアル・ウィーラーソーリヤ（スリランカより）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

聖霊から禁じられて（その２）

～2019年4月コルネリオ会例会メッセージから～

横浜指路教会　牧師　藤掛順一

さて，トロアスでマケドニア人の幻を見た時に初めてパウロたちは、これまでの歩みにおいて聖霊が自分たちの計画を二度までも妨げた理由を知ることができました。聖霊は、彼らをマケドニアへと渡らせ、そこでみ言葉を語らせようとしていたのです。つまり「アジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられた」のも、ビティニア州に入ることをイエスの霊が許さなかったのも、主が示して下さる新たな地でみ言葉を語っていくためだったのです。私たちはこの部分を一気に読みますから、主がそのようにして彼らをマケドニアへと導いて行かれたのだと納得することができます。しかし，それは結果として分かったことで、「アジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられた」その時の、またビティニア州に入ろうとしたら「イエスの霊がそれを許さなかった」その時のパウロたちの思いはどうだったのだろうか、ということを想像してみたいと思います。彼らは主の福音を宣べ伝える伝道に熱く燃え、その意欲に溢れていました。そのために自分の命をささげ、あらゆる困難をも引き受けようとしていたのです。そういう熱意をもって、主のために最もよいと思う計画を立て、それを実行しようとしていたのに、他ならぬ主ご自身がそれを禁じ、妨げたのです。どういう事情かは分かりませんが、これを妨げておられるのは主ご自身であり、聖霊であることがはっきりと分かったのです。人間による妨害なら、力を尽くしてそれと戦うことも出来たし、何らかの迂回路を見出して対処することも出来たでしょう。しかし聖霊がそれを禁じているなら、それは人間の努力によってどうにかなることではありません。彼らはそういう事態に直面したのです。しかも二度続けてです。「神さまどうしてですか？」という問いが当然彼らの間に起ったでしょう。「私たちはあなたのためにこの働きをしており、あなたが伝道のために遣わして下さったからこのように歩もうとしているのに、そのあなたがどうしてそれを妨害するのですか」という抗議の思いも湧き起ったでしょう。「神さまは何を考えているのか分からない」という不信も生じたのではないでしょうか。そのような体験の中では、「もういやです。こんなことになるなら、もうあなたに従い仕えるのはやめます」という思いになっても不思議ではありません。自分ならきっとそうなるだろうと思います。ここに語られているのは、そのようになっても不思議ではないような事態なのです。そのことをしっかり見つめておきたいのです。

そしてこのことを見つめる時に、この出来事と、ここに描かれているパウロたちの姿は、私たちに大切なことを教えてくれます。この出来事が教えているのは、聖霊のお働きは、私たち人間の思い、願い、意志、計画を超えたものであって、時としてそれを否定し、妨害し、私たちを自分の思いとは違う他の道へと歩ませるものだ、ということです。私たちは聖霊のお働きを、つまり神のご意志、ご計画を、自分の思いによって「こうだ」と決めてしまってはなりません。聖霊は私たちの思いや計画をはるかに超えた仕方で働くのです。この場合も、小アジア伝道を構想し、その要となるエフェソで伝道しようとしていたパウロたちの思い、計画をはるかに超えて、聖霊は彼らをギリシアへと、ヨーロッパへと遣わしたのです。パウロの考えていたことも決して小さな、せせこましいものではありません。しかしそれよりもはるかにスケールの大きなことを、神は、聖霊は考えておられたのです。あのコルネリウスへの伝道の

出来事もそうでした。聖霊が、ペトロの思い、ユダヤ人としての常識をはるかに超えて、異邦人であり、ローマ帝国の軍人だったコルネリウスにキリストの福音を語ることを命じ、主イエス・キリストによる救いの出来事が彼らの上にも起っていったのです。ペトロもパウロも、自分の思いや計画を聖霊によって否定され、変えられ、思ってもいなかった道へと進んでいくことの中で、自分の思いをはるかに超えて大きい主の救いのみ業のために用いられていったのです。

またここに描かれているパウロたちの姿が私たちに教えているのは､聖霊によって自分の思いや計画が妨げられ、否定された時にどうすべきか、です。彼らは、聖霊によってアジア州での伝道を禁じられると、向きを変え、違う方向へと歩んで行ったのです。そしてビティニア州に入ることも禁じられると、また方向を変えたのです。そのようにして港町トロアスに着いたのです。そのように彼らは何度も歩んで行く方向を変えました。聖霊に自分たちの計画を禁じられ、妨げられると、その都度方向転換をして、新しい道を歩んで行ったのです。それは外から見れば迷走しているように見えるし、無定見な、行き当たりばったりの歩みのように思われます。しかし大事なことは、彼らは聖霊に禁じられ、妨げられたことによって、歩みを止めてしまわなかったということです。主に与えられた使命を果たすための旅を放棄することはなかったのです。拗ねてしまって､「もういやです。あなたに従い仕えるのはやめます」と投げ出すことはしなかったのです。そのために彼らは結果的に、聖霊が彼らを導こうとしている道を正しく歩むことができ、トロアスからマケドニアへと渡って行くことができたのです。聖霊によって自分たちの思いや計画を禁じられたり，妨げられる時にどうすべきかがここに示されています。私たちはともすれば､「あなたのために、あなたの伝道命令に従ってこのように歩もうとしているのに、そのあなたがどうしてそれを妨害するのですか」と文句を言い、そして「もういやです。あなたに従い仕えるのはやめます」という思いで、主に仕える歩みを止めてしまいます。しかしそれでは、聖霊が私たちを導いてなさせようとしているみ心、神のご計画を知ることができなくなります。いろいろ方向転換をしながらも、主に与えられた伝道の使命のために歩み続けることが大事なのです。そのように歩み続けていると、どこかで､「聖霊はこのように自分（たち）を導こうとしておられたのだ」ということを示される時が来るのです。そのことを信じて、主のみ心をいつも新たに祈り求めつつ、与えられている課題を、柔らかい心で果たしていく私たちでありたいと思います。　　（おわり）

コルネリオ会の皆様へ

桜林美佐（防衛問題研究家）

はじめに

コルネリオ会を知ったのは、つい最近のことでした。出会いに心より感謝しています。まずは自己紹介方々、私がここに寄稿させて頂くに至った経緯からお話ししたいと思います。

私は東京のごく普通の家庭で育ち・・と言いたいところですが、どうもあまり普通ではなかったようです。家族には縁が薄く､ひとりで過ごすことのほうが多い毎日でした。とはいえ大学までは行かせてもらい、社会人になってからは生活のために、とにかく必死に働くことしか考えてきませんでした。

現在は「防衛問題を研究する」などという非常におこがましい肩書で文章を書くなどしていますが、全く思いもよらない出会いめぐり逢いによって、導かれるようにこの職を務めているというのが率直な表現になります。

子供の時にニュースキャスターが主役の映画を観て漠然と憧れていましたが、大学を出てからはその気持ちも冷めてしまい、乗馬クラブで馬の世話をしたり、駐車場でアルバイトをする日々を過ごしていました。そんな時にたまたまテレビ番組のアシスタントオーデションに誘われ、受けてみたら合格してしまったことが運命を変えました。

その後はテレビのキャスター、リポーターを経て番組の制作にも携わるようになり、ラジオ局のニッポン放送では16 時間勤務の泊まりニュースデスクを１０年ほど務めました。目の前にできそうなことがあれば何でもチャレンジしてみようと、防衛問題への取り組みも周囲の人々の勧めにより始めたものです。

はたから見ればいかにも幸運で、実際に多くの人が憧れる職を与えてもらったわけですが、実は私は４０年以上、心から「楽しい」と感じたことはありませんでした。朝から晩まで心配ばかりし、寝ている間も悪い夢ばかり見てうなされ飛び起きることが長年の悩みでした。

教会の扉を開けた日

ある時、英語のレッスンを受けるため米軍の横田基地に行った際のことです。その先生はカトリックで、ある時、基地内の教会に連れて行ってくれました。私の祖父母は内村鑑三に帰依していましたが、同じキリスト教でもカトリックとは縁もなく関心もないようなことを伝えたものの、私の英語力ではほとんど通じなかったようで、それならあなたも教会に行ったらいいと勧めてくれるのです。その後、彼女はわざわざ麹町のイグナチオ教会に行き偵察！？までしてくれて、あそこに行ったらどう？といいます。

ここで行かないと、ただでさえ話題に困る英会話の時間をやり過ごすことができない・・・そんな動機で、初めて教会の重い扉を開けたのです。そしてその時にミサに与った感動は一生忘れないものとなり、この日から、洗礼を受けるまでの道のりが始まることになりました。

受洗は福岡県の教会でした。麹町で準備のための勉強をしていましたが、その途中で結婚することになり陸上自衛官である主人と引っ越すことになったのです。自衛隊のすぐ近くに小さくて素敵な教会があったことはこの上ない幸せでした。朝6時すぎに付近をウロウロしていると、朝ミサに向かう神父様が出て来られ、それが福岡での最初の出会いになりました。

教会の人たちは自衛隊にどんな感情を持っているのだろう、そんなことを当初は心配していました。事実、「憲法9条を守る」署名をするシスターがいたり、反戦平和活動を公然とする人もいて、その点にかなり抵抗感を持ちました。フランシスコ教皇の掲げる「核廃絶」に異論はありませんが、それまでのプロセスにおいては冷戦終結に至った時のような一時的な「軍拡」も必要と考える私は果たして信者として許されるものなのか、等々の逡巡が常にありました。

しかし、思えば自衛隊は「平和を仕事にする」と明言している組織であり、この大看板は主イエスの教えと同一だということに気づいたのです。実は、数少ない自衛隊関係のキリスト者には国防や安全保障について理解を深める役割が付与されているのかもしれない・・と。

国防と信仰

ある日、知人が駐屯地の見学に来た際、同行された方が偶然にもクリスチャンで、しかも「国防と信仰の関係」を研究しているというので驚かされました。コルネリオ会の存在を教えてくれたのはその方でした。会については、キリスト教と戦争に関わる本を多数出している石川明人・桃山学院大学准教授の著書に書かれているとのことでしたが、実は、私は石川明人先生のことは何年も前から知っていたのです。それなのに、ちゃんと本を読んでいなかったのです。思い切ってコンタクトをとり、コルネリオ会会長の石川信隆先生をご紹介頂いたというのがこれまでの顛末です。

現在の日本では軍事と信仰は全く関係がないか、あるいは相反するもののように受け止められているように見えますが、言うまでもなく本来は密接であるべきものです。あの横田基地で見たような、戦闘服姿の人が昼休みに一人で神様と触れ合える（信者でなくても気軽に入れる）教会、あるいは「みことば」に触れる機会が自衛隊にもあったらいいのになあと夢想するようにもなりました。

自衛隊が組織的に日本の伝統行事に近い神事に関わることも政教分離云々で避けられているような状況ですから、現状では壁は高いですが、いずれはコルネリオ会の皆さまが残された軌跡により新たな歴史が生み出されることと私は思っています。

自衛官の多くは強く優しく逞しい働きをしています。災害派遣では、自分の持っている携帯糧食を被災者に差し出し、空腹や寒さをものともせず黙々と活動します。幕僚監部などでは心も体も疲弊させながらも奮闘する姿があります。しかし、この人たちが傷ついた時に癒しになるのは誰かの感謝の言葉、家族の存在、カウンセリング・・・と人それぞれであり、不変的に確立されたものはありません。何も手だてを見いだせない人もいるでしょう。

防衛装備品は買うだけでは全く機能せず、いくら数を揃えても精強な軍はできません。過酷な使用環境によって壊れやすい装備を「修理する能力」こそが、実は最も重要です。もちろん最新鋭装備が必要な分野はありますが、いずれにしても修復能力が不可欠で、これは装備だけでなく人にも当てはまります。

わが国をとりまく安全保障環境は激動の時代に入っています。今こそ、自衛隊に神様の豊かな恵みが注がれることを祈って止みません。

「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」（マタイ福音書5章9節）

献金感謝（2019.12.1-2020.3.31）

皆様の献金を心から感謝します。

矢田部稔・和子、長橋和彦、圓林栄喜・さゆり、山下和雄、桧原菜都子、石井克直、匿名